

長原遺跡発掘調査現地説明会資料

2002年10月20日
財団法人大阪市文化財協会

(1) 今回の発掘調査の成果

・弥生時代(図2) 竪穴住居・井戸・溝・穴などが発見されました。いずれも弥生時代中期後葉(紀元前1世紀)頃のものと考えられます。竪穴住居は直径約7.5mの円形のもの、一辺約3mの方形のものがあります。円形の住居は深さが約0.4mあり、直径約0.35mの柱穴が見つかりました。床面からは石器を作った際の割りくずと考えられる複数のサヌカイト片が発見されました。一方、方形の住居は穴や溝などが埋まった後、その上に作られたと考えられます。柱穴は見つかりませんでした。

井戸は直径1.1m、深さが1.5m以上あり、中から土器や木片などが見つかりました。溝は大きなもので幅1.5m、深さ0.5m以上ありますが、いずれも水の流れた明らかな痕跡は確認されず、集落を区画する役割のものである可能性もあります。

・古墳時代(図3) 南北方向に延びる、古墳時代中期(5世紀)頃の溝群が発見されました。幅0.4m、深さ0.2m程度のものが多く、約1.2mの間隔で、30条近い溝が並んでいました。これらの溝群が何のために掘られたかは不明ですが、畝の畝間であった可能性などが考えられます。

・飛鳥～奈良時代(図4) 南東から北西方向に流れる大きな川のあとが発見されました。川は奈良時代には幅8m、深さ1m程度あり、飛鳥時代にはさらに大きなものであったようです。川からは祭祀のために川に投げ込まれた墨画土器をはじめとする多くの土器や、銅銭(和同開珎)・木製品・牛馬骨などが出土しました。

・平安時代以降 水田や畝が長期間にわたって営まれていました。室町時代のものと思われる島畝は、土を島状に盛り上げ、高い部分では乾燥した環境に、低い部分では湿潤な環境に適した作物を栽培していたと考えられます。江戸時代には南北方向の耕作溝が見つかりました。

(2) 今回の発掘調査の意義

調査地周辺地域における弥生時代中・後期の集落は、長さ約700m×250mの微高地上(図1の網掛け部分)に営まれたと考えられています。東隣で行われた昨年の調査(図1の印)ではこの時期の生活のあとは見つからないため、今回の調査地は集落の北東限に当たると考えられます。

一方、一般に竪穴住居は弥生時代後期頃を境として円形から方形に変化すると考えられていますが、本調査では両者が同時に発見されました。近隣の調査でも、両者が同時

に見つかり、今回と同様に方形の住居では柱穴が確認されなかった例があります。方形のものが本当に竪穴住居かという問題も含め、その機能と構造を検討する上で重要な資料といえます。

古墳時代の溝群については、東隣の調査で同時期の水田が発見されており、溝群の機能や、隣接地で異なる土地利用が行われた理由の解明が期待されます。

また飛鳥・奈良時代の川は、大量の祭祀用土器や牛馬骨が見つかった東隣調査地の川の続きとみられ、旧平野川との連続性を考える上でも貴重な知見が得られました。

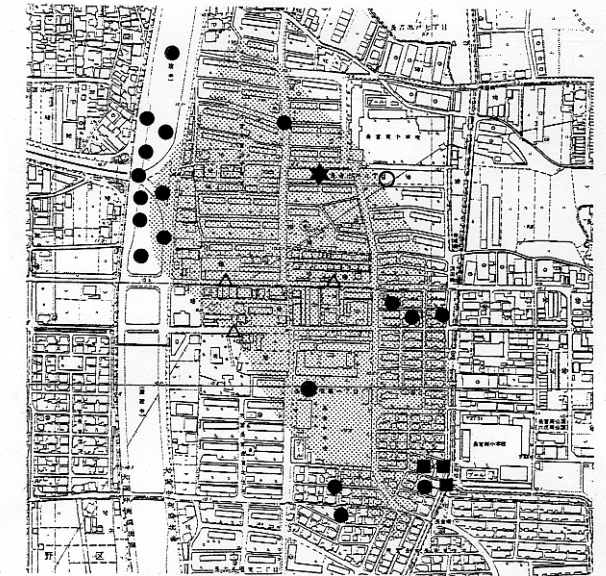


図1 弥生時代中期後葉から後期前半の集落分布(1/10,000)
★ 今回の調査地 ● 住居・井戸など
■ 方形周溝墓 ▲ 遺物多数

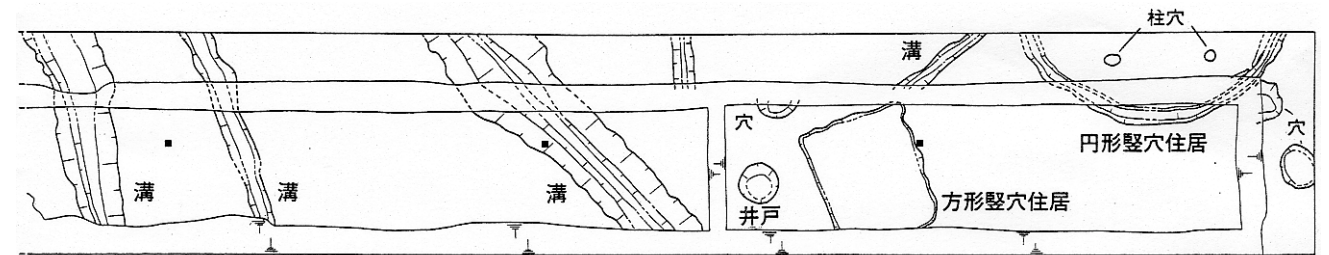


図2 弥生時代の遺構

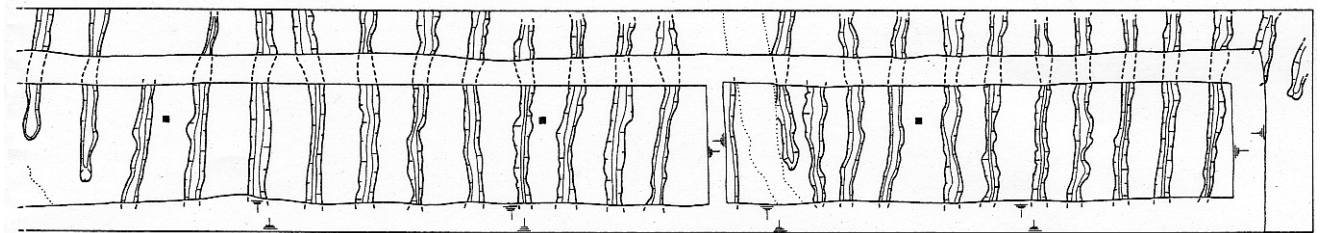


図3 古墳時代の溝群

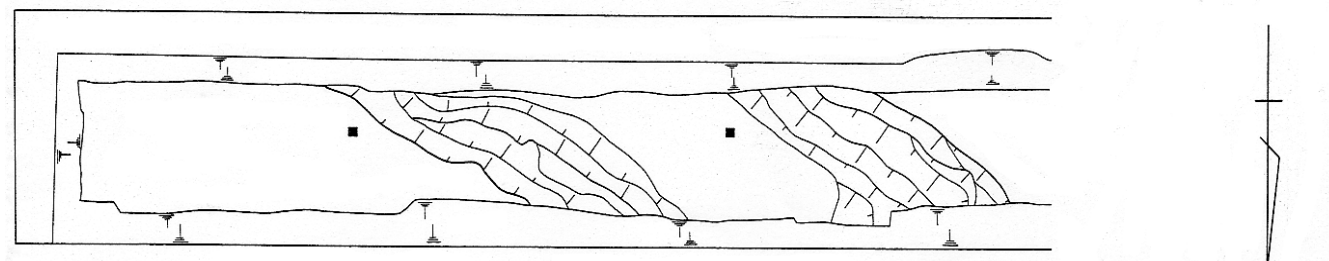


図4 奈良時代の川のあと